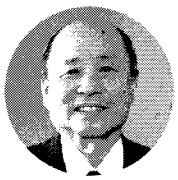
文化・芸術

鎌倉だより

三木卓

お弁当なしでもずっと見ていたい



6月

梅雨に突入した。もともと悪い左足がいっそうしびれる。あとはひたすらあけるのを待つのみ。

本家筋の静岡市馬場町在住の田辺義明さんから封筒が着く。あけてみると、△富士山静岡空港開港記念▽の切手シートである。

□□□

田辺義明さんは中国専攻の社会学者だが、同時に鉄道ファンであり、飛行機ファンでもある。このところずっと「航空ファン」誌に中国の飛行機状況のレポートを書いていて、ぼくもいろいろ教えてもらっている。

そのかれだから、送ってくれたのだろう。牧之原市と島田市にまたがる新空港は、ぼくの父親の故郷に近く、できれば一度行ってみたいと思うが、目下の神経痛は、とてもそんなことを許してくれない。切手や添えられた写真を見て楽しむ。

あのあたりで△富士山▽は、すこしはなれているのではないか、と、はじめぼくは思ったが、上海やソウルから飛んで来る人々にとっては、静岡県全体が富士山でかまわないのだ、と気づいた。それはいわば、ニッポンというようなものである。

実際、この切手シートについている空港の全景写真を見ると左端に雪をいただいた富士が、ハッキリと姿をあらわしている。新聞にも、晴れた日には見える、と書かれていた。

□□□

ぼくは、空港が好きである。多分、飛行機世代ということになるだろう。いちばん最初に行ったのは、在大連時代の周水子飛行場（現大連空港）で、学齢前、お弁当をもって家族といった。草がぼうぼうと生えていて強風になびき、滑走路に機影はなく、古ぼけた格納庫があるばかりだった。お弁当はたちまち砂まみれになってしまったし、とうとう飛行機を見ることができなかった。

それから、どれだけの空港で乗り降りしたか。いわゆる大空港よりも、ローカル空港が好きである。まわりの自然の中に、こつぜんとあらわれた現代技術文明の粋ともいうべき公園。あるいは、夏草のかがやく波がはてしなく続く解放された野。そこへ降りてくる一日数便の飛行機。ぼくはお弁当なしでも、いつまでも見ていたい。

今度の富士山静岡空港は、国内・国際線ふくめて十数回の往復便があるようだから、けっこうにぎやかである。機種も、MD90やA320などで、とくになじみの深いボーイング737も活躍するようだ。737は滑走路があまり長さを必要としないので、地方空港では依然として愛用されている。

□□□

六月四日、静岡空港は開港した。一番機は福岡行きの日航MD90で、乗客は一三三人。国内九八番目というから、静岡県ではじめてというのは、遅いことになるが、それだけここは交通が便利だということにもなる。

しかし、やっと開港したのか、という思いもある。それというのも、建設にあたっていろいろ大変で、とくに最後の段階で空港そばの立木が具合がわるいということに気づいて開港をのばさなくてはならない、ということになったときにはおどろいた。

それが石川嘉延知事の職を賭しての英断で解決したときには、もっとおどろいた。やるもんだ、と思った。

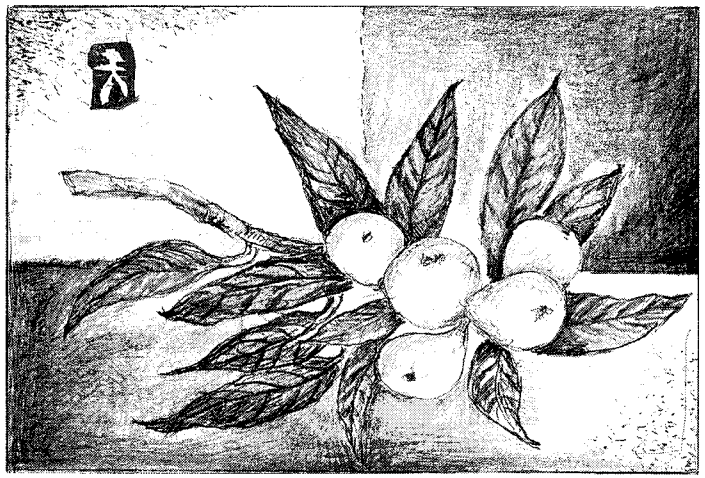
石川さんには在職中にいくどか仕事でお目にかかったことがある。頭の回転が速く、鋭い人だという印象だった。

石川さんが去り、新たな知事選がはじまっている。次の知事にもがんばってほしい。

（作家、鎌倉市在住）

苦節時代

前章で紹介した小川さんの△文学態度と宗教世界の自然な融合▽への腐心は、やがて小川文学の世界に、どの作品をどのように切ってもにじみ出



天野赫二郎「ビワ」

空気を想わせる世界を連想させるものである。それでいくと小川さんの

はなかろうかというふうにも考える。この作品は作家志望の文学青年の苦悩を描いた作品である。

フランス留学体験もあ

枝には作家志望者に対する理想的読者という役割も負わせて、婆やとは異なる意味での外部への橋のような役割を負わせている。

ぼくには、かれの知事

異なっている。漱石の高等遊民には斜に構えた体制や常識への反発がある

が、晃一は外部に対することは婆やらにまかせて、ひたすら文学至上主

長編2作目の「ゆれる」の神さま」（ポプラ社）

生と死のえぐ

映画監督 西川 美

「どう映像にしようかと考小説には解放感がある」と話東京都新宿区のポプラ社

でいくつもの映画賞を受賞した。日本映画界の新星として脚光を浴びた西川美和さんだが、最初から映画監督になりたかったわけではないという。

「たまたま映画の現場に入って、脚本を書いていたらプロデューサーに見せてみろと言われ、いつの間にか監督に。小さいころは、映画監督より物書きになりたかったんですよ」

映像の世界に進んだものの、書くことが大好きだった西川さん。脚本を読んだ出版社から声が掛かり「ゆれる」の小説版を執筆。初めての小説は三島賞候補に挙げられ、映画界だけでなく文壇の注目をも集めることになった。

2作目の小説「きのう

のドラマを、それぞれの人登場人物を主役にして仕立て直した。

「映画では感情の動きを可視化するのに工夫が

は、新作映画「ディア・ドクター」の番外編とも言える短編集。医師免許を持たないまま寒村で医療をしていた男が主人公ま

描
の
明